



タイのカセーン大にJDP制度を利用して留学した農学専攻の学生が卒業式で学位を授けられた卒業生(左)と教員(右)ら。カセーン大で開かれた卒業式にも参加した(大原 隆)

大学 研究力向上、ノウハウ共有

名古屋大

タイの首都、バンコクに本部を置く国立カセーン大は、強みの農業分野で世界の大学の上位100位以内に属する。名古屋大大学院に在籍している浅野航さん(28)は21年3月から約1年間、その名古屋大で熱帯植物のサゴヤシを研究した。研究留学は、名古屋大とカセーン大と共同で開設した博士後期課程のJDPの一環だった。

学生 修業期間変えずに留学も

日本と海外の大学が共同で編成した教育課程を学生が修了することで、その連携する大学が連名で学位を授け出す「ジョイントディグリー・プログラム(JDP、共同学位)」が、国内でも少しずつ認知度を上げていく。20

進む海外大学との共同学位

は「歴史が付いた」と研究に説明、肥料などを扱わなくても大きく成長するという。これまで解けていなかったサゴヤシのメカニズムについて研究し、根に生息する菌類が良い影響を与えている可能性があることを突き止めた。研究内容をまとめた論文は3本が研究誌に掲載され、無事、学位も授けられた。

岐阜大

地元企業との橋渡し役も

一方、岐阜大は、国内の大学では唯一、インド工科大学ハテ校と連携、新たにJDPを設立する。国内の他大は助言もを行う「全国大学ジョイント・ディグリープログラム協議会」の会長も務め、取り組みに注力する。岐阜大JDPの推進機関の小山博之機関長は「学生へ質の高い教育機会を提供しつつ、地域貢献にもつながる」とJDPの利点を説明する。

や同校の教員らが持つ産業官の情報、人脈のネットワークも活用できるとし、インドに進出した地産企業を後押しできる」と強調する。

14年の制度創設から10年間で27プログラムが誕生したが、このうち3分の1以上にあたる11プログラムを名古屋大と岐阜大の2大学が行っている。黎明期から積極的に関わり組んできた両大の狙いなどを探った。(清井博章)

実地で学べたことが、今のキャリアに生きていると振り返りながら、「文化や価値観が違つても研究留学で元々経験は大きく、世界などでも働ける自信につながった」と話した。

文科省も後押し「国際化に期待」
文部科学省によると、国内では23年3月時点でJDPに12大学が取り組み、計27プログラムを展開している。国際的に教育の質が担保され、学生にとっては教育期間内に卒業(修了)が可能な「お得な留学制度」としてさらに広げ

岐阜大は本年度、グワハティ校と共同で両校の学生向けに、短期留学を組み込んだ修了証発行型プログラムも開始する予定。JDPの取り組みを社会人向けで、数年内に社会人向けのプログラムも展開する考えだ。小山さんは「プログラムでの短期留学で、(本格的に現地に)進出する前に文化や人々の考え方を肌で感じる」ことができ、国際性の高い教育プログラムで、地域の産業発展にも寄与したい」と語った。

も認められる大学となるよう、より高いレベルで活躍していきたい」と意欲を語った。

その上で、「JDPで日本の学生たちの海外への送り出しを促進するとともに、日本の大学の国際化も進められる」と期待を寄せた。

この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。